

[総合研究]
サービス論体系の構築

共同研究者

- 代表 齋藤重雄（日本大学経済学部教授）
姉齒暎（大妻女子大学社会情報学部助教授）
長田浩（兵庫県立看護大学助教授）
貝塚亨（日本大学大学院経済学研究科博士課程）
櫛田豊（青森大学経営学部助教授）
佐藤拓也（県立新潟女子短期大学専任講師）
立石昌広（長野県短期大学教養学科助教授）

はしがき

現代のサービスは、経済の高度な発展を基礎とする、日本においては1960年代以降のものであり、勤労者階級が大量に消費するようになったものである。サービスの大量消費はサービスの大量現象をもたらし、「サービスの時代」を招来し、その実態把握を固有の課題とした。日本での実態把握は生産的労働論の延長として行なわれたために、サービス労働の価値形成性が主題とされた。しかし、価値形成性を巡る論争は依然として決着を見ない状況にある。この反省は、未決着の重要な一因がサービス概念の不一致にあることを明らかにし、サービス概念の確立を焦眉の課題とした。

サービス概念やサービス労働の価値形成性は極めて重要な2つの課題ではあるが、現代サービスを巡る重要課題はこれらに限られないことも明らかである。そこで、前回に次ぐ本研究では、「木を見、かつ森を見る」ために、2つの課題を含む重要な諸課題を析出し、これら进行分析するとともに、諸課題全体あるいは課題毎にその体系化を試みることを企図し、各人の関心に基づいて次のテーマを掲げた。

- 齋藤 現代サービスの経済論体系への序言——方法と課題——
姉齒 情報社会における「情報」の変化とその本質
長田 保険医療サービス論体系の構築に向けて——医療のサービスの経済的評価を中心に——
貝塚 サービス概念の検討
櫛田 サービス生産物とその経済的性格について
佐藤 「公共サービス」の拡大と老人福祉
立石 中国の社区サービス経済モデルの変革

この間の成果の一端は、既に共著『現代サービス経済論』（創風社、2001年4月）に結実している。今回の課題達成の度合や成否については以下の本文に譲らざるをえないが、概して言えることは、特に体系化を巡っては道半ばとすることである。道半ばが意味することは、課題が比較的新しく一見取り組み易い反面、課題が決して容易なものではなく、むしろ難解であり、また期間が2年に限られたことで

ある。途上にあるとは言え、着実に前進しており、後日の結実が期待される。特に、回を重ねた研究会での意見交換は、未だ本文には現れていない副産物を少なからず生み出している。

(斎藤重雄稿)